
魔法少女リリカルなのは～餅がのどに詰まって転生～

うどん屋TANUKI 広島支店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 餅がのどに詰まって転生

【Nコード】

N5863P

【作者名】

うどん屋TANUKI 広島支店

【あらすじ】

神によって転生させられた青年 蒼乃 朱紫は魔法少女リリカルなのはの世界に行くこととなる。果たしてこの先どうなるのだろうか

2011年2月18日 タイトル一部変更

ブローグ なんかこの空間真っ白なんですけど（前書き）

初めましてうどん屋TANUKI 広島支店です。今作品は処女作
ですので皆様よろしくお願いいたします

プロローグ　なんかこの空間真っ白なんですけど

プロローグ　なんかこの空間真っ白なんですけど

俺は今なんかとおおつても不思議な空間にいる。

で．．．．．なんか変な人が俺の目の前でジャンピング土下座をしている。

おつと、自己紹介がまだだったな！

俺の名は蒼乃^{あおの} 朱紫^{あかし}ちよつと人よりアニメなどが好きな高校生だ。

しかし、なしてしがない高校生のおれがここにいるのだろうか．．．？

いろいろ考え込んでいると一人のお爺さんが声をかけてきた

？「あのお〜。」

朱柴「何ですか？　　というかここはどこですか？」

？「ここはお〜天界でえ〜ワシは．．．ゼウスじゃ」

俺は自分の耳を疑った。

この爺さん今なんて．．．

朱紫「は．．．？　天界？ゼウス？何いつてるんですか」

ぜ「いやD A K A R Aワシはゼウスでここはてえ〜ん〜かあ〜

いい〜じゃといつておろう」

朱紫「え〜つと．．いや．．ええええええ〜!!!!!!?」

ゼ「いや〜お前の地球でのなんか寿命のことを記した紙を破つてしまつてお主を殺してしまったのじゃ」

朱紫「いやいやいや。待て待て待て!!!!!!何が切欠で俺死んだし！」

ゼ「いや．．お主ここに来る前一人で鍋をつついておつたろ」

朱紫「（そういえば．．）はあ．．．」

ゼ「で．．その中にもちが入つておつたろ」

朱紫「へえ．．」

ゼ「お主はそのもちにのどを詰まらせて死んだのじゃ」

朱紫「Orz」

ゼ「まあ、さつきも言ったようにワシが責任を取つて別世界に転生させるので問題なあ〜し」

朱紫「そうですか．．．．．Orz」

ゼ「で、何とお主には特別にアニメの世界に行かせてやる。前世ではオタクっぽかったしな」

朱紫「ヤッフウウィ〜でアニメのタイトルは!!!!!!!!!!」

ゼ「魔法少女リリカルなのはじゃあ〜」

ゼウスは背景に戦隊物並みの爆発をバックで起こしながら答えた

朱紫「Yes!!!!!!」

朱紫も先ほどとは一転しても興奮している

ゼ「で・・・テンプレとしてお主の願いを聞いてやろう」

朱紫「う〜んと、じゃあ・・・さまざまなプラスなステータスをすべてマックスにしてくれ・・・後、本の内容が手に取るだけでわかる能力に完全記憶能力と瞬間記憶能力とあと地球のアニメ、漫画、ゲームに出てくる能力を片っ端殻まとめた本をよこせ・・・それと本に載っている能力を使えるようにしてくれ」

ゼ「チートじゃな・・・して容姿はどうする？」

朱紫「金髪で青眼で髪はロングにしてくれ・・・容姿はまあ普通でいいか」

ゼ「分かった（よし、女顔にしよう）では転生させるぞ」

朱紫「ok!!」

あ・・・体が淡い光に包まれていく・・・

ゼ「あ・・・そうじゃ、転生したら赤ん坊じゃから」

朱紫「おい！そういうことは先に」

シュン

ゼ「行ってもうたか・まいつか」

こうして蒼乃 朱紫の第二の人生が始まった・・・・

ブログ なんかにこの空間真っ白なんですけど（後書き）

あとがき

えゝこのような駄文を読んでいただきありがとうございます
次回の更新はたぶん明日になると思います

朱紫「いい加減だな」

うつ・・・

まあこんなのでなければこれから

（「もちがのどに詰まって転生」）をよろしく願います

オリキャラ紹介その壱（前書き）

何かさっき投稿したはずなのに消えてるのもう一回投稿だ

オリキャラ紹介その壱

オリキャラ紹介その壱

名前 蒼乃 朱紫《あおの あかし》

設定 転生する前はワリと頭のいい高校に通っており、成績もまあ良かった。ルックスは普通であり運動もそこそこできた。その辺にいる高校生であつたけど、友人Aによってオタクとなり様々な漫画、ゲーム、アニメに手を出している。リリカルなのは、f a t e / s t a y n i g h t がお気に入り

年齢&身長&体重 16才で172cm、65kg

ちなみに転生前は黒髪黒目

転生後の設定 名前はそのまま。神に普通の顔で頼むと言ったが、女顔になってしまった。ははっざまあwwww

金髪青眼ロングヘアになっている。テンプレとしてサラサラヘアである。

年齢&身長&体重（無印開始時）9才で132cmで28kg

家族構成 父 蒼乃^{あおの} 紫朗^{しろう}35才 イケメソ、優しい

母 蒼乃^{あおの} 朱音^{あかね}29才 若い 優しいが起ると怖い

旧姓 アカネ・グランデイス

ちなみに両親は元管理局員のエースとストライカー

レアスキル
稀少技能

ファンタズムメモリー

幻想の記憶・・・本の内容が手に取るだけで分かりその本に載っているものを使える能力

特別能力 完全記憶能力と瞬間記憶能力

変換資質 凍結変換 炎熱変換 （変換のスキルは先天性である）

魔力量 無印開始時SSSランクオーバー

魔力光 濃紺色

魔導士ランク 陸戦SSS+ 空戦SSSオーバー

魔法形態 ミッドとベルカの混合ハイブリッド

使用魔法 ダークネスシューター・・・アクセルシューターの強化版。1発あたりデイベインバスター3発分の威力。最高で205発操作できる。

ブリザードバスター・・・デイベインバスターの強化版。溜めなしでスターライトブレイカーと同じ威力。使用者の魔力の範囲だったらバリアとかシールドを凍らせて無効化できる。

ファイアークラスター・・・オリジナル魔法。広範囲殲滅魔法。1発の魔力スフィアを操作して拡散させる。威力は溜めなしでラグナロクより少し劣るくらい。

ネオ・ラウンドシールド・・・防御魔法。範囲がとても
広くて硬い。

カラムティ・エンド・ブレイカー・・・極限まで魔力を溜め
て収束し放つ朱紫の持つ最強の必殺技。
アルカンシエルより強いため短い。完全詠唱つきで威力1・75
倍（当社比）

デバイス・・・ジェノサイド。気さくな男性型のインテリジェント
デバイス。朱紫の父のものだったが朱紫に譲る。指輪になっている
1stモード 剣・日本刀になっており主に身体強化
をする。接近戦用

2ndモード ハンドガンタイプ。砲撃とか遠距離用
3rdモード グローブタイプ。オールラウンドで
近距離と遠距離をそつなくこなす。

Finalモード ???

朱紫「なあ、作者あ」

なんだ、どうした

朱紫「何か突っ込みどころがたくさんあるんだけど」

たとえば？

朱紫「まあ俺の容姿のイメージがどんなのかとあとデバイスのFi

nalモードの形態とかさあいろいろだよ」

お前の容姿のイメージは髪の毛とかはイナイレのアフロディで顔はうんfateのセイバーをもっと可愛くした感じかな

朱紫「Orz」

デバイスのFinalモードは秘密な

朱紫「そつか．．．．（哀）」

ではこの後少ししたら1話をあげますので

朱紫「お楽しみに」

オリキャラ紹介その壱（後書き）

えゝキャラ紹介終了ということでは今回終わりました。

この後先ほども言ったように1話をあげます。
では朱紫君タイトルコールどぞ

朱紫「えゝつと次回餅がのどに詰まって転生 第1話人はこれをフ
ラグというにtake off」

第1話「人はそれをフラグという」(前書き)

ハイ、はじめました記念すべき第1話。今回は朱紫誕生から翠屋
暗黒期真でのお話です

第1話「人はそれをフラグという」

? side

ここは海鳴市大学病院。ここで一つの命が誕生した

朱紫「おつぎや〜（転生完了〜）」

?「あら、起きてたのね、お母さんですよ。」

朱紫「あだだ?（誰だこの人、いや待てよ今お母さんって言ったよ
うな）」

朱母「ねえ、あなたこの子の名前決めたの?」

朱父?「おお、いい名前を思いついたぞ。この子の名前は僕と君の
名前を取って...朱紫だ!!!」

朱母「いい名前ね。紫朗さん」

紫朗「そうだろ、朱音。今日からお前は蒼乃 朱紫へあおの あか
し」だよ」

朱紫「あだだとう、おどさん、おかさん（ありがとう。お父さん、
お母さん、にしても前と名前同じかまあ大方ゼウスのせいだろ）」

朱・紫『しゃべったあ〜!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

朱音「あなた、しゃべったわよこの子。」

紫郎「ああ！！！！凄いぞ朱紫！！！」

朱紫「あだ！！（うわよく見たらこの人たちすっげえ若い）」

紫郎「今日はお祝いだな！！！！出生と初しゃべりで！！！」

朱音「そうね！退院できたら是非お義父さんとお義母さんや親戚呼んでお祝いしましょう！」

紫郎「ああ！そうだな」

朱紫（テンションたっけえなあ）。何か今日からこの家族と生活できるなんてうれしいなあ）

．．．．．

そして五年後何かいろいろあつて朱紫五才の誕生日

朱紫「早っいやいやいや早すぎだろう。いろいろってなんだよ！！！」

あらあら危ない子ですね。地の文に叫んでいますよ

朱音「どうしたの？朱紫、急に叫んで？」

朱紫「いや．．．なんでもないよ母さん」

朱音「あらそう。まあいいわ！今日は朱紫の誕生日よ！とっても素晴らしいプレゼントがあるわ」

朱紫「えっなににに！？」

朱音「お父さんが帰ってきてからの楽しみよ（がちゃっ）あら噂をすれば」

紫郎「たっだいま〜！ハッピーバースデー朱紫い！！！！！」

朱紫「お帰り父さん！！ありがとう」

紫郎「何と今日は素敵なプレゼントがあるぞお！！！」

朱紫「なににに！！」

紫郎「じゃじゃ〜ん」

紫郎が取り出したのはきれいなリボンでラッピングされた白い箱だった

朱紫「開けていい父さん！？」

紫郎「ああ」

がさごそ．．．．．

朱紫「これは．．．．．指輪？」

紫郎「ただの指輪じゃないぞ．．．なんとインテリジェントデバイスなのなあ！」

朱紫「やった！（もらえなかったらどうしようかと思ってたんだがラッキー）」

紫郎「それは父さんのお下がりだけどそれでもいいか？」

朱紫「うん！魔法が使いたいと思っていたからうれしいよ！（なんで俺が魔法のことを知ってるかというところ父さんと母さんが管理局員のエースとストライカー級の魔道士ってことや魔法のことを教えてもらったからさって俺はいつたい誰に話してんだろ）」

紫郎「あんな朱紫、魔法は人を傷つけるものだから取り扱いには十分気をつけること。いいか！？」

朱紫「うんっ、ねえマスター認証していい？」

紫郎「ああ、結界張って庭でやろっ」

朱紫「うん！行こう！」

そして庭に出て朱紫は深紅の魔法陣を展開する

朱紫「マスター認証・蒼乃 朱紫《あおの あかし》術式はミッドとベルカの混合ハイブリッド。俺のデバイスに名称を登録、名称はジェノサイド・ブレイド 愛称はジェノサイド．．．いくぞジェノサイド、セットアップ」

ジ「OK、旦那行くぜ」

うわ．．このデバイスすげーテンションなどと思っていると俺のバリアジャケットが構築されていく

クロノのバリアジャケットを和風にした感じでとげがとれてて深紅と蒼で構成され俺の手には日本刀があつた

ジ「旦那、すげー魔力だなオイ。まあ俺もそれに合わせて作られてあるから大丈夫なんだけどな」

朱紫「ありがとう父さん」

こうして朱紫はデバイスをゲットした

．
．
．

? side out

朱紫Side

そして次の日

朱音「朱紫、今日いい喫茶店を見つけたのよ。いきましょ。」

朱紫「うん（喫茶店ってまさかな．．．．．）」

そして俺は母さんと一緒に喫茶店にいった

カランコロン．．．

？「いらつしやいませ」

この声はまさか．．．

桃子「2名さまですか。こちらへどうぞ」

やっぱり．．．

桃子「ご注文は何になさいますか？」

朱音「え〜つとこのフレンチトーストセットとあとコーヒーを、朱紫は何にする？」

朱紫「う〜ん、カルボナーラとコーヒーを、」

桃子「あら、うちの娘と同じ年頃なのにコーヒーが飲めるの、凄いわねえ」

朱音「あら、娘さん何才何ですか？」

桃子「五歳ですよ」

朱音「あら、朱紫と同じね、」

朱紫「俺、その子と友達になりたいなあ（まあ、早めに介入したほうがいいだろ）」

桃子「あら、うれしい、でも今どこにいるか分からないのよ。」

朱紫「じゃあ、探してくるよ。」

朱音「ご飯はどうするの?」

朱紫「戻ってきてから食べるよ、行ってきます」

朱音「いつてらっしゃい」

カランコロン

桃子「元気なお子さんですね」

朱音「でもあの子娘さんのとか知ってるのかしら」

朱・桃「あ」「」

あらら・・・早とちりですね・・・あつても原作知識あるしいいよね

タタタ・・・

え〜っとなのはの泣いている公園はっ
とここだ!

ヒックヒック
いたいた・・・

朱紫「ねえ、君なんで泣いてるの?」

朱紫Side out

なのはside

公園で一人で泣いていると誰かが声をかけてきたの

朱紫「ねえ、君なんで泣いてるの？」

なのは「ふえ．．だ、誰？」

朱紫「俺は蒼乃　朱紫《あおの　あかし》きみは？」

なのは「なのは、高町なのはなの」

朱紫「なのはか．．いい名前だね」

そういつてあかしくんが笑うとなんだか胸がときどきしてきたの

朱紫「どうしてなのはは泣いてるの？」

なのは「あのねお父さんが怪我してお母さんは仕事で忙しくって
お姉ちゃんがお父さんの看護で忙しくって家じゃあお兄ちゃんが怖
いからなのははいい子にしてくなくちゃならないの」

なぜかわたしはあかしくんにはこのことを言っていいような気がし
て話した

するとあかしくんが

朱紫「そうなんだ。でも我慢しなくていいんだよ」

といって抱きしめてくれた

わたしはそれがとってもうれしくてまた泣いてしまった

なのは side out

朱紫 side

きつとこのこはいろんなことを我慢してきたんだ……
それにまだこのこを、なのはを完全に救ったわけじゃないんだ。偽善かもしれないけどこれから起こるいろんな事件からこの子をそしていろんな人たちから救おうと思う。

いろいろ考えてるとなのはが泣き止んだ

朱紫「もう大丈夫だね、なのは」

なのは「ヒック、うん」

朱紫「お母さんも心配してるから帰ろうか」

なのは「うん」

こうしてなのはと朱紫はであった

第1話「人はそれをフラグという」(後書き)

うわ・・・・・・・・ggggすぎだよ・・・

朱紫「この駄作者め」

うっう・・・まあ気をとりなおして朱紫これを読め

朱紫「ああ・・・えーっと次回「トマトと淫獣と青い宝石」にT a
k e o f f

第2話「トマトと淫獣と青い宝石」(前書き)

1話はgggdだったんで今回は割りとすっきりさせてみようと思います。

無印編始まります

第2話「トマトと淫獣と青い宝石」

第2話「トマトと淫獣と青い宝石」

三人称 side

朱紫がなのはと出会ってから4年後、あれから色々あって朱紫となのはは私立聖祥大付属小学校に入学して、アリサやすずかと友達になった

朱紫「はあ、またこのパターンかよ。色々って何なんだよ、ハア」

まあこの間のお話は多分番外編で書くよ

朱紫「そうか」

朱音「朱紫、大丈夫？」

朱紫「大丈夫だ、問題ない。です」

朱音「そう、ならいいけど。なのはちゃんたちが来てるはよ」

朱紫「うん、今行くよ」

俺は支度をすまして下に降りる

朱紫「おはよう。なのは、アリサ、すずか」

アリサ「おっそあゝい、全くこんな美少女たちが毎日迎えにきてやつてるのにい」

さすがアリサさん自分で美少女とはまあ、可愛いけどね

朱紫「自分で美少女とか言うなよ、まあ確かに可愛いけど」
ボンッ

アリサ「ア、ア、ア、ア、あんたはなな何いってんのよ」

朱紫「よし、行くぞなのは、すずか」

な&す「う．．うん／／／／」

アリサ「無視すんな／／／」

こうやっていつも俺たちはバス停に歩いて行って登校している。

ところ変わって学校での風景

一時間目の算数にて

すう／すう／

先生「おい蒼乃、この問題を解け」

1 8 6 3
× 9 5 7 4

ガタッ

朱紫「1 7 8 3 6 3 6 2です」

先生「くっ、正解だ」

生徒「「「「「「蒼乃（君）すげえ（すごい）」「「「「「

すうゝすうゝ

そして屋上、ゝ、

四人で集まってお昼ご飯を食べています。

アリサ「ねえゝみんなは将来どんなことしたいの？」

すずか「私は機械系が好きだから（はむ）工学系で専門職がいいなゝと思ってるけど、アリサちゃんは？」

アリサ「あたしはがんばって勉強して会社を継ごうかなあと」

なのは「そっかゝふたりともすごいよねゝ」

アリサ「でもなのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

なのは「うん、それも将来のビジョンの一つではあるんだけどゝゝやりたいことはなにかあるような気もするんだけどゝゝまあそれが何なのかはつきりしないんだ」

朱紫「そっか」

なのは「わたし、特技も取り柄も特にないしゝゝ」

アリサ「バカチン！！！！！」

ペシッ

アリサ「自分からそういうこと言っんじゃない！！！！」

すずか「そうだよ、なのはちゃんにしかできないこときつとあるよ」

アリサ「大体あんた理数の成績はアタシよりいいんだから、それで取り柄がないとはどの口が言うわけ！！！！ああ〜」

そう言っているとアリサはなのはに飛びかかり口を引っ張る

なのは「ううあ〜だってなのは文系苦手だし体育も苦手だし〜」

アリサ「それに朱紫！！あんたなんで授業も聞かずに今までのテストが全部満点なの〜」

朱紫「だって問題簡単だし」

高校生なめんな！！

アリサ「くやしい〜！！次の塾のテストで勝負よ」

朱紫「はいはい」

すずか「アリサちゃん落ち着いて〜」

小3の会話じゃないですね。

分かります

・
・
・
・

そして放課後

アリサ「朱紫、今日のドッジボール凄かったわよね〜」

朱紫「そうか？」

なのは「うんっ」

すずか「凄くボール早かったね」

アリサ「ああ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

とアリサが指をさしたのは林道

すずか「そうなの？」

アリサ「ちょっと道悪いけどね」

なのは（はっここタベ夢で見た場所？）

す&ア&朱「」「どうしたのなのは」「」

なのは「ううん、なんでもない」

すずか「大丈夫？」

なのは「うん」

朱紫「んじゃ、いくか」

す&ア「」「うん」「」

なのは（まさかね）

すずか「なのはちゃん」

なのは「あっうん」

タタタッ

？（たすけて）

な&朱「はっ」

ア&す「どうしたの二人とも」

なのは「何か今声が聞こえなかった？」

朱紫「助けてって言う？（そっぴや今日から無印だったな）」

なのは「そっつ」

？（たすけて！）

朱紫「多分こっちのほうからだ」

だっ

アリサ「なのは、朱紫どこいくの」

たたた

なのはと朱紫が走ったその先には一匹のフェレットらしき動物がいた

アリサ「どうしたのよなのは、朱紫」

すずか「見て、動物怪我してるみたい」

なのは「う、うん。どうしよう」

朱紫「とりあえず動物病院に連れてくぞ」

三人「うん」「」

・ ・ ・

先生「けがはそんなに深くないけど衰弱してる。ずっと一人ぼっちだったみたいだね」

なのは「院長先生ありがとうございます」

す&ア「ありがとうございます」「」

朱紫「で、おいくらですか？」

先生「お代はいいわ」

朱紫「はあ、そうですか。」

アリサ「先生これってフェレットですよ、誰かのペットなのでし

ようか」

先生「フェレットなのかな。変わった種類だけど、それにこの首輪についているのは宝石なのかな」

先生が宝石を触るとフェレットもどきは起き上がりなのは手を舐めてもう一度眠りに付いた

そして院長先生が「しばらく様子を見る」といって明日まで預かってくれることとなり塾に行くこととで解散となった。

.
. .
. . .
. . . .

三人称 side out

朱紫 side

そして夜

（きこえますか僕の声がきこえますか、お願い僕のところへ時間が危険がもう）

朱紫の家

朱紫「（この声、念話、ユーノか）父さん、母さん、俺ちょっと念話が聞こえてきたとこに行つて来る」

二人「うん、分かった気をつけて」

朱紫「いくぞ、ジェノサイド」

ジ「OK、旦那」

朱紫はジエノサイドをつけてユーノのところに向かった

朱紫 side out

一方高町家では

なのは side

なのは（この声、昨日と同じ、行かなきゃ）

なのははばれないようにそつと家を出た

はあっはあっはあっ

そして目的の動物病院に到着した

キイイイン

なのは「うっうっ、また、この音」

？「ウヴオオオオオオ」

フェレット「はっ」

？「ウヴオオオオオ」

なのは「はっあれは」

ずがぁぁん

あつフェレットさん危ない

パシッ

キャッチ成功

なのは「何々、いったい何なの」

？「ヴオオオオオオオ」

フェレット「来てくれたんですか！」

え・今

なのは「喋ったあ」

？「ヴオオオオオオオ」

と・とりあえず逃げなきゃ

なのは「そのお何がなんだわかんないけど、、なんなの何が起きてるの!？」

フェレット「君には資質がある。お願い僕に少しだけ力を貸して」

なのは「資質？」

フェレット「ぼくはある探し物の為にここではない世界から来まし

た、でも僕一人の力じゃ思いを遂げられないかもしれないんです、だから迷惑だと分かっているんですが資質を持った人に協力して欲しくて．．．御礼はします、必ずします、ぼくの持っている力をあなたに使って欲しいんです．．．．僕のを魔法の力を」

えっ．．

なのは「魔法？」

？「ヴオオオオオオヴオオオ」

ズドーン

フェレット「御礼は必ずしますから」

なのは「お礼とかそんな場合じゃないでしょう」

今はあの変な物体を何とかしなきゃ

？「ヴオオオオオオオオオオヴオオ」

なのは「どうすればいいの！？」

フェレット「これを」

そういつてフェレットさんが渡してきたのは赤くて丸い宝石

なのは「暖かい．．」

ユーノ「それを手に僕の言つとおりの繰り返しして」

なのは「うん」

するとさっきの物体が私に迫ってきた

？「ヴオオオオオ」

なのは（たすけて．．朱紫君．．．）

私はなぜかそのとき朱紫くんのことを思った
そして声が聞こえた

朱紫「ジェノサイド、ラウンドシールド」

ジ「OK、旦那」

ガキイン

？「ウボアア」

私は目を開けるとそこには待ち望んだ存在が日本刀を持ち深紅と蒼
の服に身を包み来てくれた

なのは「朱紫くん！！」

朱紫「遅くなつてすまない、なのは、フェレット」

フェレット「あなたは．．．一体」

朱紫「説明は後だ。さっきの起動パスを」

フェレット「はい．．いくよ僕のあとに続けて言葉を！」

なのは「ふえ．．う．．うん。」

フェレット「我、使命を受けしものなり」

なのは「我、使命を受けしものなり」

フェレット「契約の元その力を解き放て」

なのは「えつと契約の元その力を解き放て」

フェレット「風は空に、星は天に」

なのは「風は空に、星は天に」

フェレット「そして不屈の心は．．」

なのは「そして不屈の心は．．」

フェレ&なのは「この胸に！！」

私とフェレットさんの声が一つに重なる

フェレ&なのは「この手に魔法をレイジングハートセットアップ
！！」

レイハ「stand by ready・set up」

なのは「にゃあ・・・」

フェエレット「なんて魔力だ！落ち着いてイメージして、君の魔法を制御する杖と体を守る強い衣服の姿を！！！」

なのは「きゅ・・・急に言われても・・・えっと、え〜っと、とりあえずこれで！！」

フェレット「成功だ！」

朱紫「ナイスだなのは」

なのは「え・・・え・・・嘘！なんなのこれ！」

？「ヴォオオオオオオ」

なのは「えっえええええええ」

慌てていると朱紫君が前に出てきて

朱紫「ジエノサイド、プロテクション！」

ジ「OK旦那」

ガキイン

また守ってくれて

朱紫「なのは封印だ！」

なのは「ふ．．封印ってなに」

聞くと叫んでいる物体を切り伏せた

朱紫「心をすませて、心の中に呪文が浮かぶはずだ」

言う通りにすると心の中に呪文が浮かんできた

なのは「リリカルマジカル！」

フェレット「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード！」

なのは「ジュエルシード！封印！」

レイハ「sealing mode．setup」

すると桃色のビームが出てきて怪物にあたった

レイハ「stand by ready」

なのは「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルXXI《にじゅういち》一封印！」

レイハ「Sealing」

？「ヴォオオオオ」

なのは「あっあれは」

なのはが指差した青い宝石が落ちていた

朱紫「あれがジュエルシールドだ」

フェレット「レイジングハートで触れて」

フェレットさんの言うとおりレイジングハートで触れるとジュエルシールドが吸い込まれていった

レイハ「Receipt Number XXI」

そして私と朱紫君の服が解けていって元の姿に戻った

朱紫「終わったか」

フェレット「はい。あなたたちのおかげで、ありがと・・・う」
ドサッ

なのは「だ・・・大丈夫？」

朱紫「なのは。落ち着け、魔力を消費して倒れただけだ。後この辺直すぞ。」

なのは「へ？ふええええええ！！！」

なのはsideout

朱紫 side

朱紫「えーっと（おい神）」

ゼ（出番じゃアア。おっと、なんじゃ朱紫？」

朱紫（うつせえなあ。あのさ転生前にいった本あるじゃん。あれ出来た？）

ゼ（出来たぞ、凄い量だからそっちの世界に出して戻すぞ）

そうキャラ紹介のときにあった本は神がなかなか作れなくてこれまでに一切登場しなかったんだ

朱紫「（あいあい）」

ゼ「（よし送るぞ）」

朱紫「（おう）」

シュン・・・

なのは「ふえ、なににに！」

うわーすつげえ量その辺の家並みだよ

広辞苑100冊ぶんくらいのサイズです

よし、触るか

ぐううなんて量だ頭が少し痛いぜ

なのは「だ、大丈夫!？」

朱紫「ああ、」

よし覚えた!

朱紫「(覚えたぞ)」

ぜ「(分かった)」

シュン - -

朱紫「よし行くぞ」

俺は霧のリングと霧の匣兵器を出した
そして炎をともし

朱紫「開匣」

魔力を込めた幻海牛を出し幻術で直した。
スベットロ・ヌディフランキ

朱紫「よしなのは、行くぞ」

なのは「う・うん」

そしてその場を立ち去った・・・

第2話「トマトと淫獣と青い宝石」（後書き）

すいませんっした~~~~~

前書きですつきりさせるとか書いておきながらこの駄文ほんとに「めんなさい

スベットロ・ヌディプランキ

ちなみに幻海牛は魔力が込めてあるから大丈夫って言うご都合主義とあっています。ほんとスイマセン

次回はなのはタイトルコールよろしく

なのは「ふえ．．．えーっと次回第3話 魔法とこれからにTak
e o f f」

第3話「魔法とこれから」（前書き）

えーッと思ったより早く投稿できそうなのでしました
では第三話「魔法とこれから」が始まります。

スベットロ・ヌディプランキ
前回の霧海牛は魔力も混ぜた状態の死ぬ気の炎を注入しているとい
う設定となりました。

だから具現化していそのままということ・・・スイマセン

第3話「魔法とこれから」

第三話「魔法とこれから」

? side

俺はなのはとフェレットを連れてあの場を離れ近くの公園に行った。

フェレット「すみません」

なのは「起こしちゃった？怪我大丈夫？」

フェレット「怪我は平気です、もうほとんど治っているから」

そついうとフェレットは体を震わせて包帯を取り朱紫たちに見せた

なのは「ホントだ、すごい」

朱紫「だが念のためこれを飲め」

フェレット「これは？」

朱紫「エリクサーという秘薬だ。魔力も回復する」

そついうて俺は手のひらに創造したエリクサーを出した

フェレット「えっと・・・いただきます」

ゴクゴクッ

フェレット「すっ凄い。この魔力なら人に戻れます」

キィィィン

なのは「ふえ！君、人だったの！」

フェレットもどき「僕はフェレットもどきじゃない！！」

はあ、ここにも地の文を読むやつがいるよ

朱紫「どうした？」

フェレットもどき「ごめん。なんでもない、」

なのは「あ．．あの．．君の名前をきいてもいいかな？」

フェレットもどき「あ．．ごめん。僕はユーノ・スクライア。スクライアが部族名だからユーノが名前です」

なのは「ユーノ君かあ。いい名前だね。私は高町なのは。仲良しの友達と家族なのはって呼ぶよ」

朱紫「俺は蒼乃 朱紫だ。名前で呼んでくれて構わない」

ユーノ「すみません。あなた達を巻き込んでしまつて」

朱紫「別にいいさ」

なのは「わたしも！」

ユ一ノ「すみません。ありがとうございます。なのはさん、朱紫さん」

朱紫「まあ、ここにいてもなんだし、今日は俺ん家に来い。話はそれからだ。」

ユ一ノ「いいんですか。」

朱紫「ああ」

なのは「あのさ、朱紫君、私はどうすればいいの。これからのことについてとか聞きたいし」

朱紫「うーん。俺ん家に泊まるか、明日話するか、念話をするかだな」

なのは「念話ってなに」

朱紫「こうすることさ【なのは、きこえるか】」

なのは「えっなにこれ【なのは、頭でしゃべりたいことを念じてみる】」

なのは【こ．．．こつ？】

朱紫【そつだ】「さて．．．どうするっ。」

なのは「うーんどっしよう、朱紫君の家に行きたいし、うーんうー

ん
ゝ

朱紫「なのは？」

なのは「あつごめんごめん、えっと朱紫君の家にお泊りする」

朱紫「そうか、冗談のつもりだったんだけどな、じゃ、いくか」

なのは「その前に家に帰るね。」

朱紫「俺も付いていくよ」

なのは「うん」

? s i d e o u t

第3話「魔法とこれから」(後書き)

お泊りフラグきたー

これでなのはフラグが完璧に・ゲフフ

キュイイイン

な、何をチャージしてるんだ朱紫！

朱紫「何って、2ndモードのブリザードバスターだが」

らめえ、凍っちゃう。ていうか本編まだ使ってねえじゃないか。

2ndもまだでてねえし

ジ「あきらめろ、作者。というか止めらんねえ。おつ旦那チャージ完了だ」

ちつくしよー「全て遠き理へ遅え」

ドッガーン

朱紫「よし作者もくたばったところだし次回第四話シスコンはうざいにtake off」

私を倒しても第二、第三の「うつせえ」ひでぶー！

第4話「シスコンはうざい」(前書き)

えゝ今回はほぼオリジナルでお送りします
では第四話「シスコンはうざい」が始まります。

第4話「シスコンはうざい」

第4話「シスコンはうざい」

朱紫 side

俺はなのについて行っただけなんだが……

恭也「そうか貴様か！なのをたぶらかしてるのは！！なのを狙うやつは何人たりとも俺が許さん！！俺が成敗してくれよう！！俺について来い！！！！」

何……この状況……？

遡ること数分前……

朱紫「なあ、なの」

なの「なに？朱紫君」

朱紫「本当の俺の家に泊まって大丈夫なのか？」

なの「お父さんとお母さんは優しいしお姉ちゃんもオッケー出してくれると思うよ！」

朱紫「そっか、」

ん．．何か忘れてるような．．．まあ、いつか

朱紫「ユーノはフェレットに戻ってな。なのはの言い訳のためだ」

ユーノ「うん。分かったよ」

キュイイイン

朱紫「よし。俺の肩に乗りな」

ユーノ「うん」

そうこうしてるうちになのはの家に着いた。

でかいな〜、

恭也「なのは、こんな時間に、はっ貴様何者だ！！！」

あっ思い出した。このおつむが残念なシスコンのことだったんだ

朱紫「いや、俺は．．．」

恭也「はっ貴様はなのはの言っていた」

聞いちゃいねえ．．

で冒頭にもどると

恭也「貴様がなのはにふさわしいか見極めさせてもらおう」

朱紫「はいはい．．いいですよ」

めんどくせえ」

なのは「いいの、朱紫君」

朱紫「いいよ、別に」

美由紀「あれ、なのはと朱紫君じゃない。ひさしぶり」朱紫君」

朱紫「お久しぶりです。美由紀さん」

美由紀「うん。あっなのは」そういえばどこ行ってたの？心配したんだよ」

なのは「ごめんなさい。お姉ちゃん、実はこのフェレットさんが心配で見に行ってたの」

美由紀「そうなの、でも言ってくれなきゃ心配するじゃない。あっもしかして朱紫君野方に乗ってるそのこ？」

なのは「うん！」

美由紀「こっちにおいで」

ユーノは美由紀さんにそう言われると俺の肩から飛び降り美由紀さんのところに行った

美由紀「かわいい〜！なのは、お父さんたちが心配してるから行くよ」

なのは「うん。お姉ちゃん」

美由紀「恭ちゃんはどするの〜」

恭也「俺はこいつと道場に行く。行くぞ！」

朱紫「はいはい・・・」

俺がめんどくさがっているとなのはからの念話がきた

なのは【朱紫君、大丈夫？】

朱紫【ああ、大丈夫だ】

なのは【後で見に行くから】

朱紫【おう】

なのはと念話してるといつの間にか道場に着いた

恭也「あがれ」

朱紫「へいへい」

朱紫「獲物は？」

恭也「そこにあるのを使え」

シスコンが指差した先にはいろんな武器があった
その中で俺は一振りの木刀を選んだ

恭也「ほう貴様はそれか．．俺は二刀でいかせてもらうが卑怯とは
言うまい。」

朱紫「おう」

恭也「女顔の奴なんかになのはを渡してたまるか！！！！！」

ハ．．イマ、コイツナンテイッタ？

オンナガオノヤツナンカニダト．．

ブッコロス！！

朱紫「いくぞ．．．」

ドンッ

俺は縮地でシスコンまで距離を詰める

恭也「速い！！くそ、なら俺も神そ．．」

そして．．

朱紫「遅い。飛天御剣流奥義・天翔龍閃」
あまかけるりゅうのひらめき

飛天の奥義をシスコンのどてっ腹にぶち込み
一撃で決めた

すると．．

なのは「すごい、朱紫君」

なのはの声が聞こえてきた

朱紫「なのは、もう話は終わったのか？」

なのは「うん！朱紫君のうちにお泊りできるよ」

朱紫「そうか。んじゃ行くか」

なのは「うんっ」

にしてもなのはの親は甘いなあ

こうして対シスコン戦は俺の圧勝で幕を閉じた

．．．

第4話「シスコンはうざい」(後書き)

よっしゃ〜終わった〜

朱紫「お疲れ」

ありがとう

朱紫「あのさ、土郎さんとか桃子さんとかってどうなったの」

ああ土郎さんはなのはと一緒に来ててあの後色々聞いてたっていう裏話的なものが

朱紫「めんどくさいんですね。分かります」

チツクシヨツオオ〜

ダダダ・・・

朱紫「あ・・・逃げた。まあいいや、えっと次回第五話「夏だ、海だ、お泊りだにtake off」

第5話「夏だ、海だ、お泊りだ」(前書き)

今回は、朱紫君の家になのはがお泊まりします。

これからのユーノの身の振り方も・・・

では第5話「海だ、夏だ、お泊りだ」始まります。

第5話「夏だ、海だ、お泊りだ」

第5話「海だ、夏だ、お泊りだ」

朱紫 side

士郎さんと桃子さんがなのはのお泊りの許可をもらって……

なのは「朱紫君の家でおとまりなの？」

さつきからなのはがこんな調子だ

朱紫「なのは、もう家についてるぞ」

ユーノ「おつきいね」

朱紫「そうか？」

ユーノは俺の家を見て大きいと言ってきたが
そうなのかな。単なる4LDKなんだが……

なのは「うん、とってもおつきいよ。」

朱紫「まあいいや。入るぞ」

ピンポン

朱音「はーい……て、あらお帰り朱紫とあれ……なのはちゃん
じゃないとどうしたのその男の子？」

朱紫「家で話すよ母さん。」

ちなみに母さんはツツコまなかつたけど今は夜の10時くらいです。
子供がいちゃいけない時間です
あしからず・・・

朱紫「て・・・俺は誰に話してるんだ」

なのは「どうしたの、朱紫君。」

朱紫「いやなんでもない。さっ、入ろう。なのは、ユーノ」

ガチャツ

朱紫「ただいまー母さん」

朱音「お帰りー、こんばんはなのはちゃんとえーつと」

ユーノ「ユーノ・スクライアです。スクライアは部族名でユーノは名前です」

朱音「スクライア？ああスクライア一族の子ね！」

ユーノ「知ってるんですか？僕たちの部族のことを」

朱音「ええ。ここじゃ寒いわ中で話しましょう」

ユーノ「はい・・・」

朱音「なのはちゃんも」

なのは「はい」

そして俺たちはリビングに行きこれまでのことを話した

朱音「そう．．．そんなことがあったの．．．大変だったわね。ユーノ君、なのはちゃん。」

ユーノ「いえ、ぼくはいいんですがなのはが．．．」

なのは「ユーノ君私は大丈夫だから」

朱音「まあ湿っぽい話は無しにして夕食を食べましょう!」

なのは「え．．．でも私たちが．．．」

朱音「あなたたちの分も用意してあるわ! 朱紫に念話で聞いたから」

なのは「そうなの? 朱紫君」

朱紫「ああ、一緒に食べようかなのは、ユーノ」

ユーノ「いいの。朱紫」

朱紫「遠慮すんな。」

なのは「そうだよ。私たちもう友達なんだから」

朱紫「なのはの言う通りだ、いくぞ」

こうして俺たちはひとまず夕食を食べることにした

そして夜．．．．はやくね？

なのは「ここが朱紫君のお部屋かぁ」

朱紫「落ち着けなのは。よしこれからのことを話すぞ」

ユーノ「うん。じゃああの青い宝石のことから話すよ、あれはジュエルシードといって願いをかなえるものなんだ」

朱紫「へえ、でそのジュエルシードが何で地球に？」

ユーノ「それはね、僕のせいなんだ」

朱紫「ユーノのせい？」

ユーノ「うん。あれは僕が遺跡の発掘中の見つけてしまつてそれで調査団に依頼して保管してもらつただけど運んでいた時空艦船が何らかの事故か人為的な災害によつて、21個のジュエルシードが地球に．．．」

なのは「それはユーノ君のせいじゃないよ」

朱紫「そうだ。それで今まで何個見つけたんだ？」

原作だと後19個だつたはずだが．．

ユーノ「2個見つけたんだけど．．」

なのは「じゃああと19個だね！一緒にがんばろう。」

ユーノ「すみません。」

朱紫「謝ることはないさ」

なのは「あっそういえば．．朱紫君って魔導士さんでえつとさつき
朱紫君のお母さんが話してたけど．．両親も魔導士さんなんだね。」

朱紫「ああ」

なのは「じゃあ、これから毎朝、魔法の練習しようよ」

朱紫「いいけど．．．いいのか俺で？」

なのは「うん（アリサちゃんやすすかちゃんには悪いけどやった！）」

ユーノ「あのー僕はこれからどうすればいいのかな」

朱紫「俺の家にいるといいよ」

ユーノ「いいの？」

朱紫「ああ。母さんも父さんもいいって言ってたろ」

ユーノ「ありがと。こ．．これからよろしく」

朱紫「ああ．．よろしく」

こうしてユーノは俺の家に住むこととなった．．．

それからなのはたちと他愛の無い話をしたり魔法の事とかを話したりして眠りについた．．

なのはと同じ布団で．．orz

朱紫sideout

第5話「夏だ、海だ、お泊りだ」(後書き)

リア充死ね核爆発しろ

朱紫「逆恨みかよ。情けねえww」

くそう約束された《エクス》．．く遅いつてブリザードバスター>
つギヤアア

朱紫「懲りない奴だよまったくえ〜と次回第6話「修行だよ!全
員集合!」にtakeoff」

第6話「修行だよ！全員集合！」（前書き）

今回は修行回です！じゃあ第6話「修行だよ！全員集合！」が始まります

第6話「修行だよ！全員集合！」

朱紫 side

なのはが俺の家に泊まって一晩が過ぎた・・・

朱紫「ふあああ・・・おはようなのは、ユーノ」

俺は寝ぼけ眼で二人に挨拶をする

なのは「おはよう、朱紫君」

ユーノ「おはよう朱紫」

朱紫「ああ、（あれ、今日は原作だと学校なのに・・・俺が介入したせいかな、今日は日曜だ）朝ごはん食べて魔法の練習をしよう」

なのは「うん！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

一同「ごちそうさまでした！」

うーん、夕方ごろにジュエルシードが発動すんだよな……………

朱紫「よし、なのは、ユーノ。俺の部屋に來い」

なのは「えっ…………魔法の練習するんじゃないの？」

朱紫「魔法の練習するんだよ。俺の部屋で」

なのは「ど…………どうやって？」

朱紫「まあついて來い」

なのは「う…………うん」

朱紫「ユーノもな」

ユーノ「うん…………（どうするんだろう）」

タタタ……………

朱紫「よし…………（あー聞こえるかゼウス…………）」

ゼウス（聞こえるぞい。どうした？）

朱紫（あのさ、漫画に出てきた部屋とかどうやって出すの？）

ゼウス（ああそのことか。投影^{トレス}で出せるところぞ）

朱紫「ああ、そうか。追加機能とか付けれるか？」

ゼウス「ああ、付けれるぞ。投影トレースの時に創造すればいいぞ」

朱紫「そっか、あんがと」

ゼウス「ああ、どういたしまして」

朱紫「うん、じゃあな」

朱紫「よし！やるか！」

なのは「え．．．何を？」

朱紫「まあ見てな！投影開始《トレース・オン》（形の固定化に成功、追加機能の追加に成功。よしこれなら！）」

俺が投影に成功すると目の前に小さなミニチュアが出てきた。そう皆ご存じ魔法先生ネギま！のエヴァの別荘だが．．．．．
．ふふふふふふふふふ

朱紫「はあはあ．．．．．よし出来た！成功だ！」

ユーノ「すごい！こんな魔法見たことないよ！どうやったの？」

朱紫「まあ．．．これは俺の稀少能力レアスキルのひとつだ。よし入るぞ！」

なのは「えっ．．．．．この中に？」

朱紫「ああ．．．この魔法陣を踏んでくれ」

そういつと俺は転送用の魔法陣を出した

なのは「う．．．うん」

ユーノ「ぼ．．．僕も」

パシユン

朱紫「よし、俺も行くか」

．．．．．

なのは「ふえええええ！何々何なのこのおっきいお城は！？」

ふつつつつ驚いたようだな！なのとこの別荘は精神と時の部屋と機能を合体させたのだよ！！

ここは精神と時の部屋の重力や熱変動の能力を取って時間の機能はそのままにして外見とかだけネギまの別荘にしてあるのだよ！！

ユーノ「す．．．凄いや．．．もうEXランクじゃないか」

なのは「ねえ朱紫君ランクって何？」

朱紫「ランクっていうのはな．．．．．」

また説明中

．．．．．

朱紫「てこった。分かったか？」

なのは「うん！で私はどのランクなの？」

朱紫「AAAランクってところかな？」

なのは「凄いのそれは？」

朱紫「うん、地球みたいな惑星^{ほし}じゃあ相当なもんだよ」

なのは「へえ、ユーノ君はどの位なの？」

ユーノ「総合でAランク位かな？」

へえ、結構あんだな

なのは「そうなんだ」

朱紫「まあ、ムダ話もなんだし修行するぞ」

なのは「うん！でどんなことすればいいの？」

朱紫「まずは、ユーノに基礎を教えてもらえ、まずはそれからだ」

なのは「分かったの。朱紫君はどうするの？」

朱紫「俺は少し研究室に閉じこもってくる」

ユーノ「何をするの？」

朱紫「ちよつといい物を作ってくる・・・」

なのは「いいもの？」

朱紫「ああ。楽しみにしておいてくれ」

なのは「うん、じゃあユーノ君修行しよう！」

ユーノ「うん。なのは」

朱紫「あ・・・・・・・・・・」

なのは「どうしたの？」

朱紫「ジエノサイド忘れた……………取りに行く
る」

なのは「にやはは……………行つてらっじゃい」

……………

3時間後

なのは「おっそ〜い！朱紫君！デバイス取りに行くだけなのに」

朱紫「ああごめんごめん。実はこの時間はちよつと向こうと進み
具合が違つんだよ」

ユーノ「違つてどついつこと？」

朱紫「ここはな……………」

またまた説明中

……………

・
・
朱紫「というわけなんだ」

なのは「向こうでの1分がこっちでの6時間って……
……もうなんでもありだね……」

朱紫「で、なのは。どんな魔法が使えるようになった?」

なのは「うんとねえ、バインドっていうのと自由に飛べるようになったよ!」

ユーノ「なのはは飲み込みが早いからね」

朱紫「そっか偉いぞなのは」

なでなで

なのは「ふああああ」

きゅううう

ドサッ

朱紫「なのは!どうした!風邪か!?しっかりしろ」

なのはさん回復中につき……

旦那あ落ち着けて・・・・・・・・

はっバインド！！まさかつ！！

これが私の全力全壊！！！！スターライト！！！！ブレイカ
！！！！！！！！！！

字が違つ・・・・・・・・ギヤアアアアア

修行＆研究終了

朱紫「よっしゃああああ！！出来たああああ！！！！！！」

なのは「ふえど．．．．．どうしたの？」

朱紫「それはな．．．」

次回へつづく

朱紫「な、なんだって」

第6話「修行だよ！全員集合！」（後書き）

朱紫「あれはなんなんだあゝ！！」

いやあ思いのほか長くなってH A H A H A H A ! !

朱紫「約束された勝利の剣！！《エクスカリバー》」

ツギヤアア

朱紫「次回は来年です！！ではでは次回第7話「誰だ！誰だ！誰だあゝ！？」」

よ．．．．．よい．．．．．お年を．．．．．

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 前編（前書き）

更新遅れて申し訳ないです

今回は後書きはありません

後、前後編なので淒くキリが悪いです

ではどうぞ

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 前編

前回のあらすじ

朱紫「ふはははは．．．．．
あれば．．．．．アーハッハッハハ」

でした．．．．．

嘘です。すみません．．．．．

朱紫 side

朱紫「あれ．．．．．
か？」

なのは「どうしたの．．．．朱紫君？」

朱紫「いや．．．．．何でも無いんだ」

なのは「そう．．．．．で何が出来たの？」

ふっふっふ．．．．．
．．．．．良くぞ聞いてくれた！！

朱紫「これだ!!」

そついうと俺は背後うしろから腕輪を出す

ユーノ「なにそれ？」

それを見てユーノがキョトンとしている。

ここは説明してやつか

朱紫「これは・・・・・・・・・・・・・・・・」

な&ユ「これは？」

朱紫「これはな・・・・・・・・擬似AMF発生装置だ!!」

なのは「AMFってなに？」

なのはは、はじめて聞いた単語に首をかしげながら朱紫に向かって尋ねる

朱紫「AMFとはな・・・・・・・・通称アンチマジックフィールドていつてAAAランクの魔法防御だ。

Aランクくらいの魔法攻撃なんかは完全に消されるなAAAでやつと通るかな」

ユーノ「そ・・・・・・・・そんなに!!」

俺の言葉に驚くユーノだがそれを軽く受け流して説明を続ける

朱紫「まあ濃度の問題もあるけどな。濃度をあげれば魔力結合も出来なくすることが出来る」

ユーノ「何でそんなものを作ったの？」

朱紫「魔力量の底上げの為。これをいつも付けてれば魔力の大幅アップができるだろ。後はまあその内分かと思う」

なのは「その内って聞かないほうがいいの？」

朱紫「ああ、聞かないほうがいい」

聞かれたらボロが出そうだし原作が……とか言えないしな。

それに……もしかしたら………俺がいる
せいでイレギュラーが出ないとも限らない

なのは「そっか」

朱紫「まあ……あまり落ち込まないでくれ。俺も悲しくなるしな、で修行のほうはどうなったんだ？」

なのは「うん。あのね修行は、えっとバインド一式、飛行魔法と砲撃魔法のディバインバスターっていうのを使えるようになったよ」

朱紫「へえ！凄いいじゃん」

これでフェイトとも互角に渡り合えるな………でもスターライトブレイカーって声が聞こえたのは

気のせいだったのか……………うんそうしよう！それがいい！！

ユーノ「あれは砲撃なんかじゃないもつと恐ろしい物の片鱗を味わったよ……………（；Д）（）ガクガク」

ユーノのあの怯えよう……………まさか……………

なのは「ユーノ君……………余計なことは……………
．ピシッ」

なのはさんレイジングハートが折れそうですよ

レイハ「stand bbbbbb yyyyyy」

ああ……………壊れたよ……………どうすんのさ

なのは「大丈夫なの……………
レイジングハート冷神愚霸阿怒は此れしきの事では碎けないの」

バキィッ！！！！

レイハ「Damage rate 90 percent . It
returns to the state of the st
and by after the shutdown . （破損率
90パーセント活動停止の後、待機状態に戻ります）」

破損状況ひとつ！！何とかしないと……………

朱紫「な……………なのは落ち着け。俺は何も聞かなかったから……………

．．．．．そうだ！今度どつか遊びに行こう！だから落ち着け
！」

なのは「ほんと！！！朱紫君！！！」

立ち直りはやつ！！

朱紫「ああ。本当だ！どこでも連れてってやる！だからレイジング
ハートを離してやれ！」

なのは「ふえ？はっレイジングハート！ご．．．．．ごめん
！！！」

なっ気づいてないのか！

朱紫「ほらレイジングハートを貸せ。直してやるから」

なのは「う．．．．．うん」

俺は某鋼的な錬金術師のように手を合わせレイジングハートの上に
おく

すると雷のような反応が出てペカペカのレイジングハートが出来た

朱紫「調子はどうだ？レイジングハート」

レイハ「The condition is good・Mr・a
kashi・Thank you（良好です。朱紫さん、ありがとう
ございます）」

はぁ、よかった

上手くいくかは五分五分だったんだがな

朱紫「もうこんな事するなよ」

なのは「ごめんなさい……………」

レイハ「All right my master」

朱紫「まあ、レイジングハートも許してくれてるしそろそろ出ようか」

連載状況だともう1ヶ月位たってるしな

なのは「そうだね」

ユーノ「（（（（；。ヾ（（（ガクガク」

いまだに震えてるユーノを俺はブラウクンマ…………ゲフンゲフン拳骨を加えて正気に戻す

朱紫「起きろぉ！」

ドゴォン!!!!

ユ一ノ「はっ！僕は今まで何をしていたんだ」

朱紫「ほらしっかりしろ！こっから出るぞ」

ユ一ノ「う．．．．うん」

朱紫「よしこの魔法陣を踏むんだ二人とも」

よし二人も魔法陣の中に入ったから俺も入って

朱紫「ようし！転送！」

パシュン

別荘を後にした

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 中編（前書き）

一回真っ白に消えたぜ！！（キリッ

だが！此れしきの事で私は負けない！

更新遅れてスイマセン

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 中編

朱紫 side

別荘を後にした俺たちは一階でお昼ご飯を作ってくれている母さんのところへ降りていった

どうやら今日は俺の好きなカレーのようだ、鼻の奥をくすぐるいい匂いが漂ってくる

それに釣られてなのはやユーノのお腹も鳴り出した

なのは「にやはは……ちょっとお腹すいたかも／＼／＼／」

ユーノ「僕もだね……」

朱紫「俺もだ、下に降りよっか」

他愛の無い会話をしつつ降りていくとエプロン姿の母さんがカレーの用意をしながら待っていてくれた

朱音「あら、静かだったわね。カレーできたわよ、席座って、なのはちゃん達も」

朱紫「うん」

な&a m p ;ユ「「は〜い「「

それからカレーを食べて英気を養いジュエルシード探しに出た

余談だがカレーはホント美味しかった

ジュエルシード探しをして約三時間、ようやく魔力反応が現れた

ユーノ「なのは！朱紫！」

なのは「うん！」

朱紫「ようやく現れたな」

ユーノ「広域結界発動！」

ユーノの足元に緑色の魔法陣が現れ俺たちとジュエルシード以外の生物は、ある程度の範囲から除外される

なのは「レイジングハート！セーットアップ」

なのはも原作ほどもたつきも無くしっかりレイジングハートをセーットアップできた

朱紫「よし行くぞジェノサイド！」

ジェ「よし！セーットアップ」

俺もそれに習いジェノサイドを起動し、その後飛行魔法展開しなのは達と共に反応のあったところへと急ぐ

ユーノ「反応があつた地点はここから北へ800mくらい行ったところ」

なのは「うん！分かった」

朱紫「行くぞ！」

少し飛んでいると神社が見えてきた

どうやら原作と同じような犬の怪物だが2回り程大きくなっており隣に女性が倒れていた

犬はどうやらこちらに気付いてないらしく難なく階段に着地できた

なのは「大きいね」

ユーノ「うん、でもなのはなら封印できるよ」

朱紫「ああ、俺はあの人を助けるから」

ユーノ「うん、行くよ！なのは！」

なのは「オッケー！ユーノ君」

掛け声と共になのはとユーノが飛び出しその瞬間、俺が女の人をかなりのスピードを出して助けに入った

朱紫「よし！今だなのは！」

なのは「うん！撃ち抜いて！ディバイン！」

レイハ「Buster」

なのはのディバインバスターが犬に当たり肉片が飛び散り消滅しジュエルシールドがむき出しになる

なのは「お願いレイジングハート」

レイハ「Sealing」

それをレイジングハートの先端部分で触れ封印しそれで終わったかに見えた……………

「ほう………こんなに早くイレギュラーが見つかるとはな
・
・
・」

半端じゃない殺気がこの場を覆うまでは

T
O

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 中編（後書き）

朱紫くんの大好物はなんと！カレーだった！

そして朱紫の事をイレギュラーと呼ぶ人物とは一体！！？

次回をお楽しみに！！

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 後編（前書き）

今回で7話終了です・・・・・・・・・・・・・・・・

長かった、本当に・・・・・・・・

では、第7話始まります

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 後編

朱紫side

「ほう・・・・・・・・・・こんなに早くイレギュラーが見つかるとはな
・・・・・・・・」

漆黒の髪と瞳に俺たちと同じ年くらいの少年だったが、体からにじみ出ているような殺気・・・・・・・・

そして、闇の書と寸分違わぬ魔道書を右手に抱えていた

俺の本能がコイツはヤバイと告げる

「どうしたイレギュラー・・・・・・・・・・怖いのか」

「はっ、そんな訳あるかよ」

俺は虚勢を張ったが、正直奴の前に立っているのが精一杯で指を動かすことも儘ならなかった

「その少女と少年も顔が青ざめているが・・・・・・・・・・逃げないのか、私の用があるのは目の前のイレギュラーだけだ・・・・・・・・」

「

「ソイツの言うとおりだ、帰るんだ」

「え．．．．でも、朱紫君が．．．．」

「いいから速く行け！！！」

俺はなのはが逃げるように怒鳴り散らす

「なのは、僕たちがいても足手まといにしかない、朱紫なら大丈夫．．．．行こう」

ユ一ノがなのはを促し神社から出て行く

「朱紫君！待ってるから！！」

なのはも声をかけてくれた．．．．生きて帰らないと．．．．

「さて．．．．．邪魔者も去ったな、はじめるか」

「一つ、いいか」

「なんだ？」

俺は気になっていること奴に聞く

「なぜ、俺を何故イレギュラーだと知っている」

「そのことが………まあいい、貴様も滅びる身だ、教えておいてやろう」

「で、何で知っているんだ」

「まあ急ぐな………我は世界の意思が創り出した構想体^{マテリアル}と言ったところか」

まさか………予想はしてたが、こんな事があるとはな

「そして………世界は貴様を消そうとしている」

「だから、俺を倒すためにお前が創られたのか、本来ならこの物語にはいない存在であるこの俺を」

「正確にはお前たちをだがな」

「まあ、悪く思っな・・・・・・・・これが世界の意思だ!!」

言い終わると同時に奴は俺に向かって突っ込んできた、とても反応しきれないスピードで

「終わりだ」

奴は腕を振りかざす

「くっ」

そして咄嗟に身をよじるが

時すでに遅く俺の左腕が宙に待った

鮮血が辺りに撒き散らされる

「ぐあああああああ……！！！！！！！！」

「旦那!!」

「くそ!!」

だが瞬間的に傷口を氷結の変換資質を使い血がこれ以上出るのを防いだ

「ほう………今まで十人ほど殺ってきたがこれを避けたのは貴様がはじめてだな」

「お褒めに頂きありがと………ジェノサイド!」

「準備は出来てるぞ」

「いくぞ!ダークネスシューター!!!!!!」

目の前にいる奴に今作れるありったけの魔力弾をフルパワーでぶつける

「やったのか？旦那」

ジエノサイドが聞いてくるがどうやら……………

「こんなものか？」

効いてないようだ

「ちつ……………無傷かよ……………さすがに傷つくぞ」

こっちは左腕を切り落とされフルパワーの魔力弾も効いてない、……………
……………対して向こうは無傷でまだ体術しか使っていないのに
こっちを圧倒している

正直絶望的だな……………

だが諦めるわけにはいかないな、まだ試作段階だが

「だがまだだ！！！！ブリザードバスター！！！！！！！！！！」

氷結の変換資質を織り交ぜた砲撃を打ち出す

だが奴は魔道書を開き

「熾天覆う七つの円環《ロー・アイアス》」

熾天覆う七つの円環《ロー・アイアス》を発現し俺の砲撃を防ぎきった、一枚も欠けることなく

「バ．．．バカな、防ぎきれぬ威力じゃねえぞ．．．．．」

俺は驚いた、まだ試作段階だといえど相当威力があったはずなのにそれを防ぎきるなんて．．．

だが一つのこと気づいた

「もしかして．．．．．その魔道書は、今まで戦った敵の能力を蒐集できるのか？」

「その通り、これは断罪の書といってな、これまで戦ってきた敵の能力を倒すことで奪える代物だ」

くそ．．．やっぱりか．．．

「そして．．．．．奪い取った能力を何倍にもして使うことができる」

「くそ・・・・・・・・チートかよ」

「無駄話もこれで終わりだ・・・・・・・・片を付ける」

奴は腕を再び振り上げ俺に一撃を加えようとしたとき

「ストップだ!!」

時空が歪みクロノと魔導師たちが現れ

「ちっ、邪魔が入ったか……おい貴様、次は無いと思え」

奴は去っていった

「おい待て！！エイミィ！」

「無理だよ、多重転移にジャミング……追いきれないよ」

「そうか……てっ君！腕が無いじゃないか」

「うるさい……近くで騒ぐな」

安心してひざを突いているのでクロノの声がもろに響く

「あ……もう駄目……」

クロノの大声で限界が来たようで俺は倒れこんだ

「おい！しっかりしろ！」

「クロノ執務官！転移の準備が出来ました！」

「あ……ああ、エイミィ！医務室に連絡を」

「もうしてるよ！いくよ転移！」

パシュン！

もう一度時空が歪みクロノたちはアースラへと転移をしていった

T O b e c o n t i n u e

第7話「誰だ！誰だ！？誰だ！？」 後編（後書き）

初バトル！！そして朱紫君大ピンチ！！！！

果たしてどうなる！！！？

次回をお楽しみに！

第8話「タイトルって付けるの難しいですね」(前書き)

今回は、なんと……あのキャラが……!

第8話「タイトルって付けるの難しいですね」

三人称 side

朱紫がアースラへと運ばれて2時間ほど、朱紫は目を覚ました

朱紫が目を覚ますと同時にクロノが自動ドアを開け、医務室へと入ってきた

「もう目を覚ましたか、医務官の見立てでは後10時間は起きないと言われていたんだがな」

「ここは、何処だ？」

朱紫の質問にクロノが答える

「ここは、時空管理局本局次元航行部隊に所属するL級艦船の第8番艦アースラの中だ…….
と言っても、君には分からないか…….」

「（そうか…….あの後、気を失ってアースラに運ばれたのか）」

「どうした？どこか痛いのか？」

考え込んでいた朱紫にクロノが問う

「いや、大丈夫。それよりデバイスは？」

朱紫は今、自分の手元に無い愛機デバイスの安否をクロノに尋ねる

「君のデバイスなら、いま技術室のメンテナンスポッドに入っているさ……にしてもうちの技術主任兼通信司令が驚いてたよ管理局の元エース二人が使っていたデバイスに良く似ているってね」

「（まさか……）元エースの二人の名前は？」

朱紫は自分の両親のことが脳裏によぎり名前を聞いてみた

「たしか……男性の方は地球の人で名前が蒼乃紫朗、そして女性のほうがミッド人。」

アカネ・グランディスという名前だったかな、今は二人とも結婚して女性のほうは、蒼乃朱音と姓が変わって名前も君がいた地球の漢字になっているが」

「あー……父さんと母さんだ……（ていうか……母さん、ミッドの人だったのかよ）」

朱紫の言葉にクロノは驚愕したような表情を浮かべる

「それは本当か！へえ……君の両親だったのか……そうだ、君の名前は？」

「ああ、自己紹介がまだだったな、俺は蒼乃朱紫」

「僕はクロノ・ハラオウン、階級は執務官だ……君は女なのに「俺」はおかしくないか？」

「俺は！！「男」だ！！！」

朱紫はこめかみに青筋を立て男という部分を強調させ思い切りクロノを怒鳴りつける

「いや．．．．その顔立ちで男とは．．．」

「アゝア！？」

「すまない．．．．．」

朱紫の気迫に押されクロノは謝る

「まあいい、そういえば俺の左腕はどうした？」

「君の左腕は切り落とされたぞ」

「いやそうじゃなくて．．．．．処分したか？」

「まだ残しているが．．．」

「現場に？」

朱紫はなのは達が自分の左腕を見てしまうことを恐れクロノに問う

「そんなわけは無いよ、きちんと此方に持ってきてある．．．．
もちろん血痕も消してあるよ」

「ありがとう．．．．．すまないが焼却して置いてくれ」

「いいのか？」

「ああ、使い物にならないだろう」

「まあな、そくだ左腕と言えは……どうする？義手も用意できるが」

「いや……此の俣でいい、というか生やす」

「へ……腕をか？」

「ああ、トレース・オン投影開始」

朱紫の右人指し指あたりに指輪が現れる

「なんだ？その指輪は」

「まあ見てなつて……ブック！」

朱紫がブックと唱えると一冊の本が浮いた状態で現れた
そして朱紫は本から一枚のカードを取り出す

「大天使の息吹、オン！」

朱紫がカードの名前を言うと一人の天使が二人の前に現れた

「我に何を望む？」

「俺が怪我したところ全部治してくれ」

「心得た」

天使が了承すると朱紫の左腕が元通りになった

「ではさらばだ」

「ああ、ありがとう」

「お．．．．．おい」

「なんだ？」

「それは．．．『クロノくん！大変大変！！』どうした！エイミイ！？」

二人の前にモニターが展開されエイミイが大声を張り上げる

『さつきその部屋からロストログリア反応があっただけど！？』

「なに！？まさか朱紫．．．．．それは」

「いやいやいや、今は俺の希少技能レアスキルで出したものだから！（やっぱ出たか）」

「そ．．．．．そうか」

『でも．．．．．さつきの反応はロストログリアの．．．．．それもかなり危険な感じだったよ！』

「だが本人がレアスキルだと言っている、機会の誤作動じゃないの

か？」

『うう．．．．．そうかなあ？』

「そ．．．．．そうですよ」

『あれ．．．．．君は？』

「あ．．．．．俺は蒼乃朱紫と言います」

『ご丁寧にも．．．．．私はエイミィ・リミエッタ通信司令と技術主任をやってるよ』

「僕のとキとは大分対応が違うんだが」

「だって俺と同一年くらいだろ」

「．．．．．君はいくつだ」

「9才だよ」

「僕は．．．．．14だ」

「．．．．．」

「．．．．．」

『．．．．．プッ』

エイミィが吹き出し微妙な沈黙が破られる

「その身長で・・・・・・・・・・14?」

『駄目だよ朱紫くん!そこは本人も・・・・・・・・あっはっは』

「ちくしょう!覚えてろよ!!」

クロノは捨て台詞を吐き部屋を後にする

『行っちゃったよ・・・・・・・・ふふっ』

「クロノの身長って・・・・・・・・」

『135か6位だよ、靴が厚底だから140くらいになるけど』

「ふはっwww14でそれって」

『まあ、それは置いといて朱紫くん、左腕が・・・・・・・・』

「ああ、これはレアスキルで元に戻したんですよ」

『レアスキルって、どんなの?』

「(ここは、ある程度ばかりして管理局が俺を欲しがるように・・・・・・えっと契約した精霊の力やその精霊が持つ武器、道具その精霊自体を扱えるんですよ」

『へえゝさしずめ精霊スプリットの使者マスターってとこかな』

「かつこいいですね(まあ実際は幻想の記憶で名前付けてるんだけ
ファンタズムメモリー)

ど)」

『照れますな』

『そのレアスキルの話、詳しく聞かせてくれないかしら』

朱紫の前にもう一つのモニターが現れる

『艦長、聞いてたんですか』

「（知らないふりつと）えっと……あなたは？」

『私はこの船の艦長をやっているリンディ・ハラウンよ、よろしくね』

「あ、どうも蒼乃朱紫です。こちらこそよろしくお願いします」

『蒼乃……紫朗さんと朱音の……？』

「あ……はい、俺の父と母です、でもどうして知ってるんですか？」

『実はあなたが生まれる前に何回か仕事したことがあってね』

「へーそうだったんですか」

『あっそうだ、レアスキルのこと詳しく聞かせてくれないかしら』

「いいですけど、俺と一緒にいた二人の場所って分かりますか？」

『分かるけど……』

「その二人と連絡を取らせてくれませんか？」

『いいわよ。エイミィ』

『準備できてます』

エイミィがボタンを押すと朱紫の前にモニターが現れた

三人称 side out

なのは side

朱紫くんが私達を逃してくれてから二時間が過ぎていた。朱紫くんのお母さんが「あの子なら大丈夫。信じて待つてあげて」と言っていたけど、正直もう我慢できなくなり家を飛び出そうとしたら私の前に

モニターが現れた

『なのは、ユーノいるか』

「「朱紫（くん）」」

良かった無事そうだ

『良かった、二人とも無事だ』

「「それはこっちのセリフだよ!!」」

『そこは・・・・・・・・俺の家か』

「朱紫よかった、元気そうね」

『心配かけてごめん、母さん』

「いいのよ」

「朱紫、あの黒い奴は・・・・・・・・」

『負けた、完敗だったよ・・・・・・・・』

「そっか、でも朱紫が無事でホント良かった」

『心配してくれてありがとうユーノ、なのはも』

「うっん、ほんとに朱紫くんが無事で良かった」

感動の再開？が終わると同時にもう一つのモニターが現れた

『はぁーい朱音、元気だった？』

「げっ！リンディ・・・・・・・・・・・・・・・・さん」

『相変わらず失礼な子ね』

「何の用なんですか・・・・・・・・」

『別にいー、ただ顔がみたかっただけよ』

「地の文に 付けんな、きもい」

朱紫くんのお母さんのキャラが・・・・・・・・・・・・・・・・

『あら、お仕置きの必要がアリそうね』

「やってみるよ、クソババア。十二年前みたいにはいかねえぞ」

正直、近くに居るのは怖いです。死ぬほど

『あらあ・・・・・・・・・・・・・・・・楽しみねえ』

緑の人の後ろに般若のようなものが見える・・・・・・・・あんな風には・・・・・・・・なりたくないの

『ふ・・・・・・・・二人とも落ち着いてください！』

『落ち着け母さん！リンディさんも！』

そして三十分後、ようやく場の混乱が落ち着き私達は朱紫くんに会いに行くために、アースラという船に転移した・・・・・・・・もちろん朱紫くんのお母さんも一緒に・・・・・・・・

無事に帰れると良いな・・・・・・・・

なのはsideout

第8話「タイトルって付けるの難しいですね」（後書き）

一回消えて、書き下ろしたらサブタイトル入力してなくて消えて・
・・・・・

大変だった、ホントに

今回の言い訳？

朱紫のお母さんは昔は凄かったです、ホントに

今は引退してるのにさらに戦闘力がアップすると言っ設定まで・
・

あとクロノの身長はテケトーです

アニメ見る限りじゃあフェイトとおんなじ位だし、でも十四歳と言
うことでフェイトより少し高めに、そして厚底靴でさらに（ry

では次回更新をお楽しみに！

オリキャラ紹介を少し変更しました

オリキャラ紹介その貳

オリキャラ紹介その貳と言うことで今回は絵を描いてみました！！

朱紫「俺のか？」

いいえ、あなたの左腕を落とした断罪者と名乗る奴の絵です

朱紫「あゝ、あいつか」

へったくそな絵なので逃げるなら今のうちです

ホントにいいの？

http://2890.mitemin.net/i21292/

えい！

載せちゃうよ？

今見ると顔の形がひどいな・・・・・・・・

朱紫「線画なので気の毒な方色を塗ってくれると幸いです」

ではこいつの紹介から・・・・・・・・

名前 断罪者(?)

年齢 見た目9 10歳

髪 & a m p ; 瞳 奥の见えない黒

魔力量 無限

魔力光 これまた奥の见えない黒

身体能力 まじパネエとしか言いよつの無いくらい強い

デバイス 断罪の魔道書

機能

一度受けた敵の能力を自由に使うことが出来るようになる
威力調節も自由に出来る

朱紫「勝てる気しねえ、俺よりチートじゃん」

・・・・・・・・・・・・・・・・

朱紫「弱点とかは？」

一応ある・・・・・・・・多分

朱紫「駄目だコイツ早く何とかしないと」

まあ、この話はいずれするとして・・・次回は朱紫、タイトルコールよろしく！

朱紫「えっと、次回は「鬼神大乱闘（笑）」にtake off」

オリキャラ紹介その弐（後書き）

SAIとか良くわかんなかったからマウスでセコセコ描いた、後悔はしている

まあいずれ修正を加えます

ではでは

第9話「鬼神大乱闘（笑）」（前書き）

今月の目標は『目指せ！更新速度UP！！』です

週一更新目指してリリカルマジカル頑張ります

自分でやっというてなんだけどもキメエ・・・

第9話「鬼神大乱闘（笑）」

C o n s i d e

今、僕達は朱紫のお見舞い（？）みたいなのに来ているのですが部屋の雰囲気混沌としています

それは何故かと言うと……

「朱紫くんよかった」

「コラ、なのは抱きつく……苦……し……い……
……死ぬ……」

「エイミィ、訓練所を借りても良いかしら」

「望むところだクソババア」

『あ……あの艦長、朱音さんデバイスは』

「「いないわ」」

まさかのデバイス使わずに模擬戦（？）をするようです。あっそういえば……

「なのは、朱紫が死にかけてるよ」

朱紫が死に掛けてたのでなのはを止めました

「ふえ、あつごめんなさい！朱紫くん！」

「ゲホッ、ゴホっ・・・・・・・・い・・・・・・・・いいよ、なのは。ユーもありがと」

ふー、よかった

「どういたしまして、あれは止めなくていいの？」

僕はさつきから睨み合いを続けているリンディさんと朱音さんの方を見る

「駄目だ。あんな風になった母さんは見たことが無い」

どうやら、朱紫でも止められないとなると相当のようだななんて思っていると、二人とも訓練室があると思われる方向に行ってしまった。

「行っちゃったね、朱紫くん」

『どうするの？』

「結界を張りに行こうかと思ってるので、訓練所の場所を教えてくださいませんか？」

『オッケー、でもまず私の居る技術室に来て、朱紫くんの相棒を渡すから』

「分かりました、技術室は・・・・」

『医務室から出て、一つ目の角を右に曲がってそのまま真っ直ぐ行

けば着くよ』

「分かりました。行こうなのは、ユーノ」

どうやらデバイスを取りに行くようです

「でも朱紫、大丈夫なのか？」

「何が？」

「魔力とか・・・色々」

さっき戦闘したのに今行っても大丈夫かと僕は尋ねる

「ああその事か。もう大丈夫だよ」

「そう、なら行こうか」

やっぱり朱紫は凄いなと思いつつ医務室を出る

「うん！」

「そうだな」

ユノside out

ジェノサイド side

負けた・・・

あれ程までに強かった旦那が訳の分からねえ奴に・・・

俺のせいで旦那があんな目に、俺がしっかりしていればあんな奴な
んかに旦那は引けを取らなかったのに・・・

デバイスには感情は無いってデバイスマスターや技師達は口を揃え
て言うけど、俺は悔しい。

だから俺はエイミイという技師にこう頼んだ

「あんだ・・・俺にカードリッジシステムを積んでくれ」

「何を言ってるの、あれは危ないシステムなんだよ！あれを積みめば
君のコアは持たないかもしれないんだよ！」

こいつが怒るのも無理は無い。

『カードリッジシステム』

これは元々、古代ベルカのアームドデバイスにのみ搭載されたシステム

カードリッジと呼ばれる特別な儀式で圧縮された魔力を込められた弾丸をロードすることにより瞬時に爆発的な魔力を得るシステムのことだ

これは、俺みたいなインテリジェントデバイスが使うとぶっ壊れちゃうからエイミイは止めたんだ

だけど……

「頼む、アイツに勝ちたいんだ」

「で……でも、下手したら壊れちゃうんだよ、君も……朱紫くんも」

「それは承知の上で頼んでいるんだ……頼む」

「はあ、朱紫くんに聞いてからだよ」

「ありがとっ、恩に着る」

後は旦那が来るのを待つだけだなと思っていると早速来たようだ

「エイミィさん、ジエノサイドを取りに来たんですけど」

「よう、旦那」

「おう、元気そうだな」

「あのね、朱紫くん・・・」

「エイミィ、ここからは俺が旦那に話すよ」

「じゃあ、なのはちゃん達は向こうに行つてよう」

「「は・・・はい」」

なのはの嬢ちゃんとスクライアの旦那が出て行ったのを見ると俺は旦那にカードリッジシステムのことを言う

「旦那・・・実は・・・」

「カードリッジシステムを積むのか？」

「!?!」

「何で旦那が・・・そのことをっ」

「自分の相棒が考えてることぐらい分かるさ」

流石が旦那だ。俺が考えていること位お見通しって訳か

「じゃあ話が早いな、旦那「駄目だ。カードリッジは積まない」な
っ！」

「大方、あのアンノウンに勝つために積むんだろ」

「ああ……あの勝負は俺のせいで」

「違うな、あれは完全に俺が弱かったせいだ……」

「だが……」

「これ以上は言うなジェノサイド、次アイツに会ったらリベンジすればいいだけだ」

「……すまねえな旦那、一緒に強くなるか」

「ああ、そうだな。一緒に頑張ろう」

簡単な話だった。旦那と二人で頑張っていけばどんな敵が来ても勝てる

これから、頑張っていこう。

「まず、結界を張りに行かなくちゃな……」

「……」

「ああ、言ってなかったな。母さんとリンディさんが模擬戦を・・・」

「だ・・・旦那・・・」

「何だ、どうした？」

あの二人が模擬戦・・・だと・・・ヤバイ、速く止めに行かないと・・・

「アースラが、沈んじまう」

「何言ってるんだ？そんなわけ」

——ドゴォォン

その瞬間爆発音が聞こえた、終わったな・・・

ジェノサイドside out

ユーノside

僕の得意な魔法は結界と補助魔法．．．．の筈なんだけど

「一撃で破られた．．．．」

朱音さんの放ったシューターが結界にぶつかり、僕が今使える最硬度の結界を抜いた。

なのはが使うデイベインバスターでも抜けないのに．．．

やっぱり朱紫が来てくれないと．．．

そんな僕の願いが届いたのか朱紫が来てくれた

「何で結界に穴が開いてるんだ!？」

「それはこっちが聞きたいよ」

「はあ、ジェノサイド結界強化だ．．．」

「ああ、了解」

朱紫が魔力を注ぎ込むと結界の穴は塞がり、より強固な物へと成った

全く、こんなに卒なく魔法を使われるとこっちのプライドが．．

「今度は破れないね、良かった」

「気を抜くなユーノ、お前にも手伝ってもらわないと結界が抜かれる．．．」

「うっ……ごめん!」

「頑張って二人とも」

なのはも応援してくれてるし頑張らなきゃ……

模擬戦ダイジェスト!

「くたばれクソババア!! ショートバスター!!!!!!!!!!」

「甘いわよ、アカネ………ラウンドシールド」

「まだまだあ! アクセルシューター!! シュート!!」

「止まって見えるわ! エクストラバースト!!」

「うぜえんだよ! アクセル! エクスプロード!!」

「ふふふふ! ソニックムーブ」

「ブリッツアクション!!」

「遅いわ! エールシュート!」

「これで終わりだ! ロスト……」

「エクシード……」

「ブレイカーーーーー！！！！」

この勝負の勝敗は決まらなかったとか何とか・・・

「な・・・何とか・・・耐え切ったな・・・」

「何とかなったね」

ギリギリ僕達が張った結界が持ち何とかなったのだが・・・

「クソババア！もう一回やれ！！」

「いいわよ、相手をしてあげましょう」

正直勘弁して欲しいと切実に思った

ユノside out

第9話「鬼神大乱闘（笑）」（後書き）

最後のほうグダグダですね。御免なさい

リンディが使っていた魔法は筆者の妄想ですので

あとカードリッジフラグをそげぶ！した主人公はこれからどうする
のやら・・・

では次のお話で～

第10話「欠点」

朱紫side

地獄絵図のような模擬戦が終わり医務室に戻った後、俺は時空管理局の執務官という比較的地位の高いクロノにとある映像を見せてもらうことにした

この映像は記録されているかどうか心配だが、あの時の対応の速さを考えると記録してある可能性が十分にある

「なあクロノ。俺とアイツの戦闘映像、記録してるか？」

「アイツとはアンノウンの事だろう？ だったら一応記録してあるぞ」

俺の思惑通り記録されているようだ。

アイツとは断罪者とか言うわけの分からない奴のことだ

映像を見ればあいつの弱点、もしくは俺自身の欠点が見つかるかもしれない

その前に見せてくれるとは限らない。が、ダメ元で聞いてみる

「じゃあその映像を見せてくれ。頼む」

「……ダメだ。あれは機密事項だからな」

「やっぱりか………」

「と、言いたいところだが君はあの時現場にいた一人だ。アイツの情報足りない今、取調べと称して映像を見せてもなんら問題は無いはずだ」

コレは予想外な発言だ。

クロノはもつと頭の固い奴だと思っていたけど、案外融通の利く奴なんだな

「ありがとうっ！クロノ！」

「まあ礼はいい。という訳だエイミィ。あの映像を用意して今僕が出したバーチャルコンソールの方に転送してくれ」

「分かったけど、あんまりこんな事はしないでね」

「それじゃあ朱紫、取調室に行くぞ。ついてこい」

やはり取調室に行くようだ。なのでクロノの後を付いて歩く

「中に入れ」

「なあ着くの早くないか？」

なんと取調室は俺がいた医務室から一つ角を曲がった先にあったのだ

「気にするな、じゃあそこにある椅子に掛けてくれ」

「あ・・・ああ分かった」

クロノの指示通り近くにある椅子に掛ける。パイプ椅子のような見た目と反して柔らかく出来ているようだ。

「じゃあ、今からあの時の映像を見せよう。心の準備は良いか？」

「ああ。後、俺やアイツが使った魔法の魔力値をグラフ化してくれ」

「ああ。じゃあ再生するぞ」

クロノがバーチャルコンソールを操作して映像モニターを出す

そこに映るのは俺とアイツ。

丁度俺がアイツに左腕を切り落とされたあたり

その後、俺がダークネスシューターを撃ち込んだところ

そこで俺はストップをかける

「クロノ、止めてくれ」

「どうした？」

「ここ、俺はフルパワーで撃ち込んだつもりだった。」

そう俺が止めた理由はそこ。全力で撃ち込んだはずなのに・・・

「確かにグラフを見ると、込めた魔力の量、密度。全部バラバラだ。誘導弾としては10点」

手厳しいな。

まずここが問題点だな。そして映像を再開する

そして今度はブリザードバスターをぶち込んだ辺り

またもやそこで止める

「これもだな。今改めてみると・・・」

「威力はあるが、それだけだ。こんなのは砲撃とは呼べないな」

やはり俺は神から得たチカラに頼り切っていたようだ

全く基本を踏んでいない。練習はしていたが所詮は自己流。

それもお遊びのレベル。これじゃあアイツには通じない

「しかし朱紫、コイツは何だ？ 砲撃と言えないがこの威力の魔力放出を防ぎきる楯。そして追いきれないスピード、この圧倒的なまでのパワー。極めつけはこの魔道書。音声は拾えないが・・・」

「ストップ。まだ、一つ気になることがある。」

そう俺が気になっていたこと

「映像を進めてくれ」

「ああ。分かった」

それはココ

クロノ達が割って入ったとき

俺が抱えている疑問は……

「何故コイツはこれほどのチカラを持ちながらお前を殺さなかったのかだ」

「っ！確かにアイツのチカラがあれば僕を倒すことなんて簡単だった事のはず……」

そう何故アイツがクロノを殺さなかったか……だ

多分アイツは俺にしか、俺のような存在にしか干渉できないのだろう。

それなら……

「（いや、駄目だ。何を考えているんだか……俺は）」

「どうした？」

「いや、何でもない。」

アイツはこれ以降も現れる。

きつとその度に俺を殺しに・・・俺を消しにかかる。

だけど、俺はまだこの世界に来て何もやっていない。

この偶然にも貰った力を使って、何もしていない。

死んでしまった少女を。

それを救うために狂った魔女を。

悲しい運命を背負った少女を。

この先に待ち構えているものを

俺に救えるとは思わない。

だけどこの力はどうしようもない事実を覆すことが出来る力だとこの力を与えられた時から俺は思っている

「それとアイツのことだが俺が話そう」

「それは助かる。こちらも情報が足りてないからな」

「じゃあ話すぞ。まずアイツのことだが、あれは自分でマテリアルと称していた。」

このことが本当なら大元を潰せばあいつが止まるということ

「そして奴が持っていた本は闇の書じゃあないな」

「なっ！何故君が闇の書の存在を・・・？」

クロノが驚いてるのは無理も無いな

闇の書のことは本来限られた人間しか知らないしな

だが俺はそれを無視して話を進める

「それはどうでもいい。あの本の名前は断罪の書という。無限書庫で調べておいてくれ。」

「どうでもいいか・・・。まあ分かった。後は？」

「こんなもんかな。」

ここで会話を打ち切り席を立つ。

「そうか。まだ何か話してないことがあるんだろう？」

「っ！鋭いな。流石は執務官ってところか」

こういう時の洞察力はやっぱり人一倍あるなコイツ

「まあいいさ。話してくれないということはいずれ話すのだろう？」

「ああ、そうだな・・・。。。。いずれ」

皆には時が来たら話す。

今はそのときじゃないだけ

「何時でもいい。頼りたいと思ったときはいくらでも力を貸すさ」

ホントに良い奴だな。ならお言葉に甘えて

「じゃあ早速訓練所に行くぞ。特訓だ」

「イキナリすぎるだろ！・・・まあいい。何をするんだ？」

それはもちろん・・・

「魔力弾の作り方と、砲撃の撃ち方。基本的なものの諸々だな」

「僕も忙しい身なんだ。付き合えるのは1時間が限界だと思ってくれ」

「分かった。ありがとな」

俺に足りないものは色々あるがまずは基本からやりなおさないとな！

朱紫 side out

??? side

「奴の魔力反応が見当たらないな。だが、また新しいのが来た・・・か」

漆黒の少年はビルの屋上に立ち遙か先を見据え言葉を紡ぐ

「まあいい・・・。この世界が・・・」

彼が何を言ったのかは風で遮られて誰にも分からない

だがその目には決意の色が宿っており、凄まじい信念を秘めているようにも見えた

やがて少年はビルの上から上空に向けて飛び魔道書を開き・・・星がきらめく夜空へと消えていった

第10話「欠点」(後書き)

更新してないので皆さま更新！

二ヶ月放置とか・・・・・・・・

今後はこのようなことが無いように頑張ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5863p/>

魔法少女リリカルなのは～餅がのどに詰まって転生～

2011年10月8日13時23分発行